

「白バラ」抵抗運動から学ぶ（ナチズム・全体主義）

1933年、ヒトラーが政権をとると、その残虐性は日に日にエスカレートしていった。ナチス・ドイツは1939年9月にポーランドに侵攻し、第2次世界大戦が始まる。ヨーロッパの多くの国々はドイツの支配下となり、ついに1941年6月には独軍がソ連に侵攻して独ソ戦が勃発した。

翌1942年1月、ナチスによって「ユダヤ人問題の最終的解決」（ユダヤ人絶滅計画）が決定され、ユダヤ人の大量殺りくが現実のものとなり、人々は恐怖の渦に巻き込まれていった。

しかし、そのような状況下においてもドイツ国民の中には反ナチスを唱える冷静な人々も存在したのである。

ナチスに迎合することなく、反戦と自由を訴えた反ナチス抵抗運動の学生グループ「白バラ」のメンバーであったショル兄妹（ハンスとゾフィー）は、巨大で凶悪なナチスに立ち向かったとして、抵抗運動のシンボリック的存在となり、その勇気が讃えられ今も語り継がれている。

当時、ミュンヘン大学の学生だったショル兄妹は1943年2月18日、ミュンヘン大学へ行き、反ナチス抵抗運動のビラをばらまいた。ところが、これをナチ党員に発見され、ゾフィーは兄ハンスらとともにその場で拘束されてしまった。逮捕後4日目の2月22日にショル兄妹らに対し裁判が執り行われたが、ゾフィーは戦争によって多くの人々が、とくに同胞が理不尽に死んでいくことが耐え難く、最後まで自らの主張を曲げることはなかった。裁判の結果は、国家反逆罪として死刑の判決が下され、兄妹らは即日ギロチンにかけられたのである。ゾフィーはメンバーの中の紅一点、21年の生涯を劇的に閉じた。

ゾフィーたちが処刑される約4か月前の1942年11月、独軍はスターリングラード（現サントペテルブルク）においてソ連軍の猛反撃をうけ、翌年2月2日に降伏した。いままで快進撃を続けてきた独軍であったが、「白バラ事件」が起きた時、ナチスの敗戦色が一段と濃くなった時期でもある。

非暴力で戦争終結と自由の権利を得るために反戦を訴えた彼女らを、国家反逆罪の罪人として斬首したことは、いかにナチスの時代が狂気であったかを物語る一例といえよう。

今年5月9日はゾフィー・ショル生誕100年にあたり、いま再び彼女に光が当たっている。ドイツ郵政がゾフィー生誕100年の記念切手を発行したことを機に、当時を振り返り、負の歴史を忘却することなく、全体主義の怖さを次世代に語り継ぐことが、私たちに課せられた責務ではないだろうか。

《1942年1月にナチスによる「ユダヤ人絶滅計画」が決定されたが、その1年半前、ユダヤ人の迫害が今後、激しくなることを予測していた杉原千畝は、カウナス（リトアニア）

で難民に「命のビザ」を発給した。

「白バラ事件」が起きた当時、杉原は独ソ戦の激戦地ケーニヒスベルク(ドイツ領東プロイセン)から、ブカレスト(ルーマニア)公使館に一等通訳官として赴任していた。

また、「白バラ」については杉原幸子著『六千人の命のビザ』P.88で触れている。ご参考まで》



ゾフィー・ショル生誕100年の記念切手

切手の文言「1943年2月22日 素晴らしい晴れの日だが
私は去らなければならない。せめて私たちの行為により、
何千人の人が目覚めれば、死ぬ甲斐がある」

家族あてに書き残したゾフィー最後の手紙。

(日本国内では秋ごろに販売される)